

うまくいくセラピー、うまくいかないセラピー

2021. 11. 28 北陸定例会
藤坂龍司

1. セラピーがうまくいくためのポイント

(1) 基本はやっぱり強化

○魅力のある強化子を複数用意する。

○効き目のある強化子を見つける。

「いつも同じ強化子になっていませんか？」

↓

選ばせてみる。

自由にさせて、何で遊ぶか観察する。

週末は強化子の買い出しに。ネット購入も。

○効き目を維持する。

セラピーの時のとっておきの強化子をいくつか取っておく（それは日頃は遊ばせない）。

強化子はチビチビ与える（一度にたくさん与えるとすぐに飽きてしまう）。適度に間引く。

適度におなかをすかせておく。

○セラピールームを魅力のある場所に

「セラピールームが砂漠になっていませんか？」

リビングはオアシス。セラピールームは砂漠、では子どもはセラピーを嫌がるに決まってる。

↓

リビングで遊んでいるものは片付けて、一方、セラピールームには楽しいおもちゃがある

「セラピールームを砂漠ではなく、オアシスに」

○セラピーは強化から入る。

すわったら、不毛のテーブル。強化がないまま単調なセラピー、では「反乱」がおきやすい。

↓

「すわって」で座らせたら、まず強化。あるいは机にすでに強化子が置いてあってもよい。

○強化子はピンポイントで。

いくら強化子が魅力のあるものでも、与えるタイミングを間違えると台無しに。

「ぐずったときに与えていませんか？」

「離席しかけた時に与えていませんか？」

「子どもが指定した強化子を与えていませんか？」

「子どもが隙を見て、勝手に強化子を取りに行っていないですか？」

↓

強化子はこちらがしっかりコントロール。こちらの目指す行動が出た時だけ、ピンポイントで与える。

○子どものしたいことを察知する（気持ちに寄り添う）。

子どもがそのおもちゃで何をしたがっているか。よく観察して、それに合わせてあげるとうまくいく。

例えば子どもはその乗り物に人形を乗せたいのに、人形を片付けてしまって乗り物だけ与えていると、子どものモチベーションが下がる。

○子どもの「飽き」の兆候を見逃さない。

子どもの反応が悪くなってきたら、強化子に飽きてきた、と考えた方がよい。早めに別の強化子に切り替える。「どれがいい？」と選ばせる。

(2) その他のポイント

○しっかり準備する。

教材、強化子といった「物の準備」だけでなく、「頭の準備」も。

どんな課題を、どんな方法で教えるか、大筋を頭に描いておく。

ぶっつけ本番だと、だいたい失敗する。

○教え手のコンディションを整える

寝不足、疲れ、イライラ、食べ過ぎ時のセラピーはうまくいかない。

子どもにあたってしまったり、泣かせてしまって、数週間の成果を台無しにしてしまうことも

↓

疲れていたなら、少し休んでから。イライラして当たってしまいそうなときは、セラピーを休む

○詰めが甘いと逃げられる

いすにすわらせても、隙があると、その間に椅子から逃げてしまう。教材で遊んでしまう。

<すきができる「魔が刻」>

- ・いすにすわらせて、大人が対面にすわる間 → 逃げてしまう
- ・いすにすわらせて、教材の準備をしているとき
- ・教材を机の上において、指示を出すまでの間 → 教材で遊んでしまう
- ・反応してから強化するまでの間
- ・強化子を与えた直後

こういうときに教材をとられないよう、常に片手か両手で軽くガードしておく。

立とうとしたら、すばやく腰の付け根を押さえる。(腕をつかむのは不快が強くてよくない)

2. 難関課題攻略のこつ

○教材にこだわる。

新しい課題に取り組む時は、その課題にベストと思われる教材を用意する。

例えば、色で赤を教えるとき、家に真っ赤なものがないからと言って、中間色のつみきを使ったりしない。真っ赤なもの、真っ黄色のもの、大人が「これならわかりやすい」と自分で納得できるものを用意してから、課題を始める。

教材は、基本的には、教えたいそのもの（例えば色）だけを強調した、シンプルなものを選ぶ。

例えば真四角の色カード、あるいは同じ形の積木。車などで教えると、車の形の方に注意を取られて、色に着目できないことがある。

○まず子どもを「いい状態」に持って行く。

難しい課題ばかりやっていると、子どもがわからないので、注意力、集中力が低下していることが多い。

そこで難しい課題に取り組む前に、一つ前の習得済みの課題（例えば色を教えるのなら、その前の物の名前付け）でランダムローテーションをひとしきりやって、状態をよくしておく。

○ランダムローテーションはテンポよく

一試行ごとにお菓子の強化子を与えていたのでは、間延びしてしまって、前のことを忘れてしまう。二つの教材の違い、こちらの指示の違い、その両者のつながりに気づかせたい、と思ったら、短い間隔で、たたみかけるように、数試行を連続する必要がある。その時はお菓子やおもちゃの強化子を与えず、ほめ言葉だけにする。

そのためには、あらかじめ、ほめことばだけで5、6試行のランダムローテーションに耐えられる集中力を身につけておく必要がある。

子どもがその課題を「わかる」のはしばしば一瞬である。その一瞬に向けて、子どもの集中力を最大限に持って行く。そして子どもが集中している、と感じた時に、畳みかけるように一気に教える。

○ランダムローテーションに乗らない子

とはいえ、単調なランダムローテーションをどうしても嫌う子もいる。比較的高機能の子どもに多い印象がある。そういうお子さんは、訓練的な集中試行は避け、ゲームの要素を取り入れるなどして、楽しく教えるとよいだろう。

高機能の子に色を教えるとき、ランダムローテーションをどうしても拒否するので、フラッシュカード的に、色カードを色を言いながら提示して、それをタッチさせる、ということを繰り返すだけで、数色、覚えてしまったケースもある。

○できなくても簡単にはあきらめない。「あの手、この手」で取り組む。

例えば大小が、最初選んだ教材で何日経ってもできない場合、そこであきらめるのではなく、教材を変えてみたり、大きいもの同士、小さいもの同士のマッチングから始めたり、指示のことばを極端

にしてみたり、あの手この手でやってみる必要がある。やっているうちに、どこかで突破口が見つかることも多い。

同じやり方で、一週間以上続けるべきではない。同じ課題でも切り口を変えるべき。

○最後は「成長待ち」

一、二か月、あの手この手で試しても突破口が見つからない場合は、仕方ないから、数か月から一年以上、寝かせておく。久しぶりに取り組むと、自然の成長に助けられ、案外簡単にクリアできることがある。